

インドルピーと通貨の信用

IMF が世界経済見通しの改定値を発表した。世界全体では前回の見通しよりも下方修正し、今年の GDP の予測は 3.3% に引き下げた。多くの国で下方修正した結果だが、主要国の中で 7% を超えるのはインドだけだ。突出している。2030 年には世界第三位の経済大国になるとの見通しも控えめなくらいだ。

そのインドの通貨、ルピーは世界の外為市場での取引量で見れば世界で 17 番目だ。トルコリラの次で、ルピーの次はロシアルーブルだ。市場での位置づけはそんなものだ。経済規模と通貨の地位とのギャップは中国の人民元が典型的な例だが、人民元の市場規模は世界で八番目だ。ギャップを埋めるため中国は人民元を国際通貨にする方針を立てたが、歩みは遅々としている。ルピーはまだそこまでも行っていない。通貨取引の拡大は信用の高まりでもある。

通貨に対する信用が高くない要因の一つは中央銀行の位置づけだ。

インドの中央銀行であるインド準備銀行 (RBI) は先週、政策金利を 6% に引き下げた。2 月の引き下げに続くもので、新総裁が昨年 12 月に就任してから 2 度目だ。彼はモディ首相に近い政府高官から転じた。確かにインフレ率は現在、RBI の目標レンジである 2% - 6% の下の方の水準なので利下げはおかしくはない。だが選挙対策であることは明白だ。モディ政権は前任の総裁に利下げの圧力をかけ続けたが実現しなかったのが首にした経緯もある。

首になった総裁の前任者は IMF のエコノミストで RBI の改革を遂行したが、彼も結局政治的圧力で辞任を余儀なくされた。現在のインフレ率が低下したのは二人の前任者の政策の効果という面がある。

インドで総選挙対策が他の国以上に重要なのはわかる。9 億人も有権者がいて、投票期間も 1 か月以上続く。利下げで金融緩和するのは有権者には分かり易い。

インドはトルコと同様、経常収支の赤字国だ。従ってこの赤字のファイナンスが円滑に進めば通貨は堅調に推移する。海外からの直接投資はネットで黒字基調が続いている。GDP の成長率の見通しを見ても今後もインドへの投資が続くことが予想される。その点では構造的にはルピーが安定する基盤はある。さらには資本市場を育成して間接投資を増加させることもできるが、今のところ多くは望めない。

後は原油高が経常収支の赤字を拡大させ、ルピーを不安定にさせるリスクは残る。